

「ART BY STUDENTS —生徒作品ギャラリー」のご案内

光 村図書ウェブサイト上で、全国の中学校・高等学校の生徒作品をご覧いただけるコンテンツ「ART BY STUDENTS—生徒作品ギャラリー」が公開になりました。作品画像と合わせて、その作者である生徒の言葉をご紹介します。サイトトップ「おすすめコンテンツ」の、「ART BY STUDENTS」のバナーをクリックすると、中学校のコンテンツへ進むことができます。全国の中学生・高校生がどんな作品をついているのか、ぜひご覧ください。



ART BY STUDENTS —生徒作品ギャラリー

中学生の生徒作品を紹介するコンテンツです。作品の画像と作者（生徒）の言葉を掲載しています。全国の中学生がどんな作品をついているか、見てみませんか。

- 身近なものを描く・つくる**
身の回りにある植物や動物、日用品などをあらわした作品です。
- 風景を描く**
学校や地域、旅先の風景を描いた作品です。
- 人物を描く・つくる**
友達や家族などを描いた・つくった作品です。
- 想像して描く・つくる**
夢や想像の世界を描いた空想画や、だまし絵などの作品です。

中学校「ART BY STUDENTS」トップページ。
風景画や空想画、デザインなど、さまざまな作品を見ることができます。

中学校は
こちらから。

高等学校は
こちらから。

美術準備室 No.14
2018(平成30)年11月28日

発行人 ■ 小泉 茂
発行所 ■ 光村図書出版株式会社
〒141-8675 東京都品川区上大崎2-19-9
電話：03-3493-2111
www.mitsumura-tosho.co.jp
E-mail: koho@mitsumura-tosho.co.jp
デザイン ■ Better Days
(大久保裕文+深山貴世)
印刷所 ■ 株式会社 加藤文明社





アトリエ
訪 問

第 14 回

小畑多丘

彫刻家

カラフルな洋服に身を包み、立ったりしゃがんだり、
思い思いにブレイクダンスのポーズを取る等身大ほどの人形たち。
台座のないこれらが木彫だと、何も知らずに見た者の誰が思うだろうか。海外にも多くのファンをもつ
彫刻家・小畑多丘がB-BOY(ブレイクダンサー)の木彫を生み出すアトリエへ向かった。

撮影 鈴木俊介



おばた・たく
 1980年埼玉県生まれ。
 2008年東京藝術大学大学院修了。
 B-BOY(ブレイクダンサー)としても活動。
 ブレイクダンスの身体表現技術や躍動を彫刻で精力的に表現し続ける。
 台座のない木彫による人体と衣服の関係性、彫刻を端緒に生まれる
 空間を追究しながら、緊張感と迫力あふれる作品を展開。
 近年の展覧会に「超えてゆく風景」展
 (ワタリウム美術館, 2018年)など。

「日本で生まれ育った自分らしい表現 ——その答えが木彫だった。」



1枚のドローイングを1分ほどで描いていく。
 彫刻で重要な手前・中・奥の3層を、色を使って意識する。



幾種類ものノミや彫刻刀を使い分ける。
 左右で偏りが出ないよう、両手を同じように使って彫るという。

トパネルを敷いたり、壁を白く塗ったりと、使いやすいように自分で改造しました。

普段はシャッターを開けて、半分外みたいなきらきにして彫っています。いちばん集中できるのは夜。特に冬の夜はまるで世界から音がなくなったかと思うほど静かだから、没頭できます。もちろん、チェーンソーを使ったりするのは日中ですけれどね。

長時間集中して疲れると、入り口近くに腰かけてひと休みします。木の緑がとてもきれいで、地面には犬のニコが寝そべっている。すごくリラックスできるんです。——小畑さんが木彫で表現されているB-BOY(ブレイクダンサー)は、あまり見ない新しいテーマですね。

小畑 ブレイクダンスは、高校時代に始めて夢中になって以来、自分の中で大切なテーマです。だから、何かを表現して生きていきたいと思ったとき、その「何か」はブレイクダンスしか考えられなかった。

木彫と出会ったのは、大学に入ってからです。このとき、木の存在感にすっかり心を奪われて、木彫の道に進むことにしたんです。

ただ、いちばん大きかったのは木彫が日本の伝統文化であるというこ



目や洋服のライン、女性の前髪など、細かなところに水平・垂直の要素を潜ませ、見る者に不思議な緊張感を与える。
 (写真提供: 小畑多丘)

と。ブレイクダンスはアメリカの文化です。それを粘土でかたどってプラスチックに置き換えて表現しても、アメリカ文化の追随にしかならない。日本で生まれ育った自分には、どんな表現ができるのか——その答えが木彫だったんです。それに、木彫でB-BOYをつくっている人なんて、他にいないと思って。

——彫刻にするポーズはどうやって決めているのですか。

小畑 誰かをモデルにすることはほとんどなくて、ひたすらドローイングを重ねながら考えていきます。その中でこれと思ったものは、正面や横からドローイングを描いて立体に起こしていく。

実は、ポーズは、実際にまねするには難しいものになっているんです。身体の構造上可能なぎりぎりのラインを攻めてつくっているから。このぎりぎりのさじ加減は大事にしているところです。

自分の作品が台座がなくても自立できるようにしているのは、緊張感を生み出したいから。そのために、水平・垂直を測って細かく計算しながら、緻密につくりあげています。作品が大きいと、彫るために向きを変えるのもひと苦勞なので、こう見えてかなり計画的につくっているんですよ。

そういう制作が続くと、バランスを取るために、衝動的なものがつくりたくなります。無心で粘土を触ったり、彫刻を意識しないドローイングを描いたり。でも、ここにはそれを同時にできるほどの広さはない。

そろそろここを離れて、新しい世界に一步を踏み出すときが近づいているのかもしれない。今よりもっとかっこいいブレイクダンスの表現を追究するために。

東京近郊の閑静な住宅地にそのアトリエはあった。門を開けると、1頭のダルメシアン犬が出迎えてくれる。耳を澄ませば鳥の声が聞こえ、目の前には葉が茂る大きな木。ガレージの姿を残す建物に近づくと、床に積もったクスの木くずとその香りが、ここが彫刻家のアトリエであることを教えてくれた。

——このアトリエ、もともとはガレージだったのですか。

小畑 そう。家でほとんど使わなくなっていた物置用のガレージをアトリエにしたんです。床にコンクリー